

6.2 史跡館城跡で金属探査

明治元年（1868）に築城された館城跡で金属探査を実施しましたので、その成果の概要を報告します。

6.2.1 館城跡の礎石と御殿

金属探査実施区域は、平成21年度の地表面調査で良好に礎石が残存していることが確認されています。これらの建物は奥御殿や常御殿と推測されており、藩主とその家族の居所や藩主が日中の政務を行う空間など、館城にとって中枢的な建物群と考えられています。また、陶磁器のほか、釘や鎌、銅製の金具などの金属製品も採集されています。これらのことから、非破壊による金属製品分布を把握することにより、館城に築かれた御殿建築の実態や空間的な機能を推測できると考えました。

6.2.2 金属探査の方法

金属探査に使用した機材はホビー用の金属探知機（商品名「GC-1072 Metal Detector」）です。事前のテストでは、ミニエー銃弾、硬貨（1円、10円、100円）には距離10cm以内で的確に反応することを確かめています。



図6.5 金属探査実施の様子

国土座標（世界測地系平面直角座標系11系）に準拠した測線を使用し、探査範囲の南北方向に測線を設定しました。測線に沿って金属探知

機を移動しながら反応地点を検出しました。反応の検出においては、複数回の走査で再現性のある反応を示す地点を反応地点として記録しました。

6.2.3 金属探査の結果

調査区の北東部、南東部、南西部の3箇所に金属反応の集中域が確認できました（図6.6）。調査区には礎石の配置から2棟の建物が存在すると推定されており（厚沢部町教育委員会2010:69）、2つの建物に挟まれたx=7730～7740の領域は金属反応の分布密度が低いことが読み取れます。平成21年度の礎石調査の出土遺物の分布も東側建物に多く見られることから、過去の調査結果とも整合する反応分布といえます。

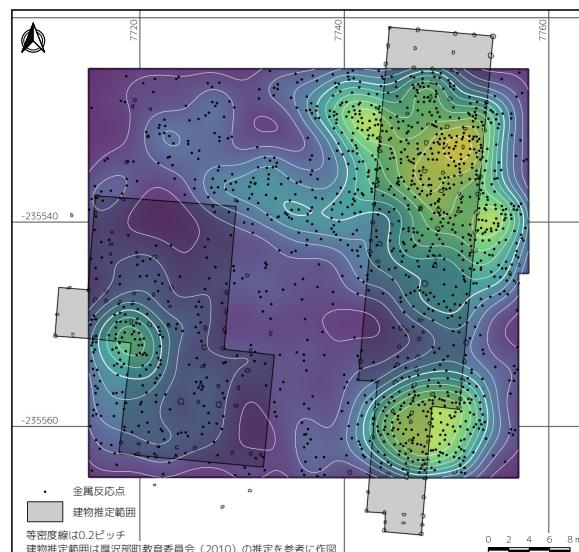


図6.6 史跡館城跡金属探査の結果

6.2.4 金属探査の結果

金属反応の分布は礎石建物の領域と合致し、館城築城時に持ち込まれた金属の集積実態を反映しているものと考えられます。本探査は館城の主要建築物である奥御殿及び常御殿において優先的に建築・整備された空間領域の存在を示唆するものと考えています。

（石井淳平）